

第54回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

審査員奨励賞：『多和田葉子詩集「まだ未来」』

出版社

ゆめある舎 谷川 恵 氏



©佐藤祐介

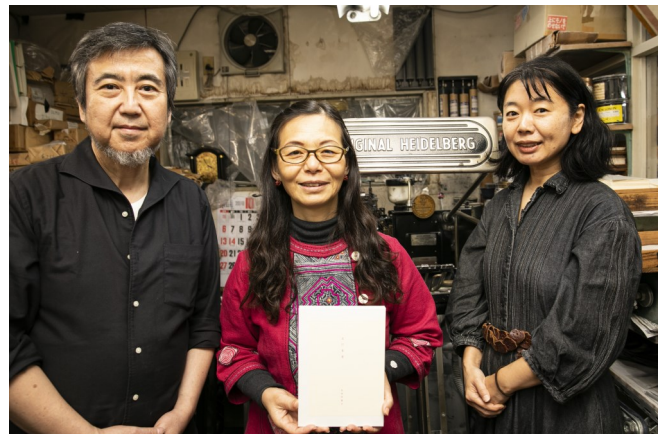
●御社の活動について教えてください。

ゆめある舎は2013年設立の、ひとり出版社です。「宝物になるような、大切な人にプレゼントしたくなるような本」の発行をテーマに、スローペースではありますが、出版活動を続けています。『せんはうたう』『くだものにおいのする日』『Mの辞典』に続き、4冊目が『まだ未来』です。弊社の今までの本は、全て、美篤堂による手製本です。今回の『まだ未来』は、「本を綴じる」という製本の概念からは外れますが、美篤堂の手の技が生かされた作品です。現在は、ブルガリアの民謡をテーマに絵を描いている、ビリヤナ・ストレムスカさんの画集を制作中です。コロナ禍でブルガリアに行けず順調とは言えない本づくりですが、今だからこそじっくり取り組める時間が取れると、試行錯誤の最中です。

●今回の作品のような造本にされたのは、どういった経緯があったのでしょうか。

多和田葉子さんの詩集を出版したいと考えた時に、最初から「活版印刷で作る」と決めていました。多和田さんの詩の言葉には、クッキリと文字を刻む活版印刷こそふさわしいです。多和田さんは、高校時代の友人ですが、当時彼女が活版印刷屋さんでアルバイトをしていて「インクのが好き」だと言っていた思い出もあります。嘉瑞工房の高岡昌生さんにご相談したところ、大きな

紙には刷れないということでした。それならば詩一篇ずつを、飾りたくなるような美しいレイアウトで印刷して頂こう、と考えました。デザイナーには依頼せず、高岡さんに文字の配置全てを委ねました。目次と17編の詩を1冊の詩集としてまとめるために、箱に収めようという考えも、原稿依頼時からあり、作者にも伝えてありました。何ページにも渡る長い詩がないのはそのためです。白い夫婦箱の製作は、最も信頼できる美篤堂に依頼しました。白い箱、白い紙、黒い活字の作品に、強い色と印象を加え、多和田さんの「普通ではない言葉」の強さも表現したく、赤い和紙で包みました。



左から 嘉瑞工房 高岡昌生氏 谷川恵氏 美篤堂 上島明子氏

●応募したきっかけや、受賞の知らせの感想、周囲の反応など、いかがでしたでしょうか。

大変驚きました。有難うございます。本の形に「綴じていない」作品なので、評価の対象にならないのではないかと考えておりました。過去の作品は全て応募させていただいております。『せんはうたう』を初めて応募した時には、受賞するのではないかと、驕った図々しい考えがありました。今回は、自分のイメージするものを可能な限り形にしたい、そのことだけにこだわりました。なので、認めて頂いて感慨深いです。予想以上に多くの方からお祝いの言葉を頂き、とても嬉しかったです。作者の多和田葉子さんにも喜んで頂



組版

けて、この詩集を作って良かったと改めて思いました。今後の励みにして、美しい本づくりにより一層注力していきます。

●**作品制作において、こだわった点、苦労した点、そのほか制作についてのエピソードがあれば教えてください。**

【印刷】詩の長さによって、行間をそれぞれ調整しています。二つ折りの用紙に見開きで印刷するので「真ん中組」（ページの中央に詩がレイアウトされる）にしていますが、折り目の場所を考慮して奇数行の作品は微調整をしています。1冊の本として不揃いに見えない範囲で、細やかに個々のバランスを整えました。目次と本文の区別をつけるために、目次は一回り小さな用紙に刷っています。



刷り上がり

【夫婦箱】箱を綴じている時も、開いて置いたときも美しい事、ずっと開いて、閉じた時にはしっかりとした感触になるように、試行錯誤がありました。「白い箱」の製作には大変な気遣いが必要で、作業は手袋をして行っています。背表紙の弊社ロゴマークの大きさと位置も最適な結果になりました。



美篤堂 夫婦箱の制作

【和紙】特別な「詩の世界」への導入として、印刷物を赤い和紙で包みました。理想の和紙が手元に少しだけありましたが、同じような和紙を探すのに苦労しました。結果見つけることが出来ず、白い和紙の中から納得のいくものを選び、希望する色に染めてもらいました。表紙・背表紙・目次の表紙を、和紙の色に揃えて印刷しました。

●**一般の方には「造本」という言葉になじみがないかもしれませんが、「造本」の観点から、本を視る」ポイントを教えてください。また、電子書籍が広がる中で、紙の本への思いや良さなど、お聞かせください。**

本で一番大事なものは「内容」だと思います。中身があつての、造本装幀です。内容に一番ふさわしい形を考えて、制作して、読者の元にお届けするのが私たちのやっていることです。今回の作品作りで、嘉瑞工房の高岡昌夫さんが「詩を載せるための『方舟』を作った」とおっしゃいました。さまざまな『方舟』が、どんな思いで作られたのか、なぜこの形に落ち着いたのか、作り手の意図を想像してみると楽しめるのではないのでしょうか。「内容」によっては、電子書籍の方が便利で似合っている場合もあります。検索機能が使えた方が読みやすい内容もあります。でも、電子書籍は「宝物」や「プレゼント」にはなりにくいと思うので、弊社が作るのは、これからも「美しい紙の本」です。(了)



※インタビュー動画はこちらからご覧いただけます。